時事新報

明治廿七年九月廿八日　金曜日
舊暦甲午八月廿九日（癸酉）
日出午前五時三十四分　日入午後五時二十九分
月出午前四時五分　月入午後四時五十六分
滿潮午前四時十七分　午後四時四十一分
（西暦一千八百九十四年）
年始より二百七十一日　年末まで九十四日

時事新報は全國中紙面の最も廣き新聞紙なり

時事新報には毎號詳細なる商況物價の報告あり

朝鮮國全圖　本年七月一日新報附錄　定價一枚一錢五厘

北清地圖　本年八月九日新報附錄　定價一枚一錢五厘

今回日清事件の報道を閱するに無くて叶はぬは右の地圖なり由て本社は前記の低價にて大方の需めに應ず郵税は一枚以上七枚までは二錢、以上七枚を增す毎に二錢を遞加す故に成るべくは數人申合せて一と纒めに注文あるを便利なりとす

韓地軍隊野營寫眞

小川一眞氏の手に成る精巧美麗の寫眞銘版圖にして　去七月十八日附錄定價一枚參錢

第一　京城なる帝國公使館
第二　仁川公園の帝國軍隊野營
第三　九峴山麓の帝國軍隊野營

を一枚の中に收め我が帝國軍隊の海外に野營して國威を宇內に輝し威風凜々、軍紀整々の狀を眼前に寫出す帝國臣民は一枚を購ふて永く座右に保存し忠勇の氣象を養ふべし
郵税は一枚以上十二枚まで二錢、以上十二枚毎に二錢を增す是亦一と纒めに注文あるを宜とす

時事新報

清國は遽に和議を請はざる可し

陸に在ては既に平壤を略取せられて日軍今や破竹の勢を以て進みつゝあれば不日にして九連城も守を失ひ奉天府亦次いで陷らん海に於ては恃み切たる艦隊を擊破せられて最早や戰鬪力なければ日本は時を移さず要害の地を奪ひ直ちに北京城下に迫るのみとならん假令ひ此の如く迅速ならざるにもせよ日清戰爭の勝敗は大體に於て既に決定したるものなれば是れより以後日本は恰も無人の野を進軍すると同樣にして四百餘州幾億千萬の民來りとても到底防いで防ぐ可らず滿清の廣き皇帝六尺の身を置くに所なからんのみと期して俟つ可ければ特も一國を成して其命脈を繋がんとするものは今日に於て宜しく速に和を請ふの外ある可らず明々白々の次第にして支那は定めて和議を申出づるならんとの說は如何にも尤もに聞ゆる所なれども我輩の所見は未だ然らず元來清國政府の組織たる頗る不整頓のみならず既に腐敗糜爛の境遇に陷り李鴻章の帷幄と北京の廟堂とは各その働を異にし李の是とする所も動すれば中途に遮られて堂上輩の認可を得ざるみと多し其國事を得ざれは李に實施の權なきが故に唯堂上の眼を掠ふて體裁の虛飾を行ひ事後に至り虛妄を構へ粉飾を要ふて纔に罪責を免れ來りしものなれば政略一貫せずして重要事務の緩なるは彼の政府に免かる可らざるの弊なるが如し左ればこそ平壤の戰にも支那が援軍を送らんとすれば先日の發令ありしにも拘はらず二萬計りの軍艦を派遣して中止したるが如き察する所我軍の精鋭を知らざるにはあらで李が心底に任せざるの事情ありしが故ならん然かのみならず遙に前日に溯れば左まで國體を辱めずして媾和の策もありしならんに叢國か機會を失ふて看すく今日の窮境に陷りたるも畢竟李の力以て隨意に國略を左右するを能はざりしが故にして一槪に之を老爺の毫に歸するは酷なりと云ふ可し然りと雖も事の發端は老爺の所爲にして直接に局に當るも亦老爺なるが故に幾多の失敗は悉く其一身の責に歸して遁る可らず是に於てか例の虛妄も亦一時を彌縫するの窮策にして樣々に外面を裝ひ敗軍も大勝と報じて北京の廟堂を欺かざるを得ず現に彼の牙山に敗走したる葉志超に重賞を與へ再び平壤に派して大將たらしめたるが如き牙山の一戰も北京政府の耳には勝利と聞へたるや疑ある可らず此程李が平壤失敗の爲めに爵を褫り黃袍を剝がれたりとの事なれども北京にては決して事實の儘に敗報を聞きたるには非ざる可し李が種々取繕ひたるが爲め其罰も黃袍剝奪位に止まりしものならん兎も角も虛誕妄は支那人の天性のみならず李に取ては自から必要もあるみとなれば今度の海戰に大敗したればとて其敗聞は次第〱に裝を改め北京に達する頃には遂に轉じて大勝利と爲り渤海灣の危急などは夢にも知らざるみとならん斯る狀勢なれば李の內心に於て一身の爲め又國の爲めに萬々媾和の利を知るも公然之れを口に發するみと能はざるは我輩の疑に掛けて明に見る所なり且つ又假令ひ多少の敗報北京に傳へられたりとするも彼の頑冥なる堂上輩が如何にして能く大勢の傾く所を看取するの明あらんや依然たる中華の尊大漢、深宮貴公子のまゝに老大したる親王大臣の詭にして空しく大國の大を恃み相替らず放言漫語して日本人の邊を犯すは例の倭寇なり海賊山賊の類なりとて悠々、花鳥風月に戲れながら時に或は逆鱗に乘じて外寇退治の嚴命を下すみとある可きのみ今事の了解を易くせんが爲め喩へて申せば彼等は我國の所謂なる華族と同樣にして家令家扶の輩が樣々の私曲を行ひ內實既に身代を傾け盡し又不法の借財に惱められて敗訴したる折柄、扨御家の經濟向は益々〱なぞとて危急を告ぐる者あるも主人公は平氣にして馬耳東風、數百年來の華族の家に借財なぞは如何樣にかして片付くならんと空賴みする其間にイヨ〱執達吏を差向けられて強制執行に及び重代の寶物は無論座右の手道具までも引浚はれて始めてソレと氣付くものゝ如く濟ふ可らざるに至りて始めて濟はざるを悔ゆるは古今東西を問はず斯る種族の常例にして北京の堂上輩に至ては其最なる者にあそあれば今度の戰爭に就ても彼等が面縛して降を乞ふの場合に至らざれば決して其敗軍の敗軍たるを知らず然るを未だ一發の砲聲を聞かざるに當りて如何にして彼等の神經を刺戟せんや請和などゝは以ての外ども取合はざるのみか却て今日を限りとして交戰を中止したらば彼より請和したるものにても猶は倭奴視したりとて驕傲ますく募るや疑ある可らず左れば我國にては飽までも大兵を派遣し彼等をして面縛降伏せしむる迄は非常激烈の戰を戰ふて如何なる外國の仲裁あるも是れには決して頓着す可らず滿清の上下を苦むるだけ苦めそれだけ彼國將來の文明を益するみとゝ知る可し

雜報

○廣嶋特報

九月廿四日午後一時廣嶋に於て　特派員　足立莊

黄海々戰の詳況

黄海に於ける日清兩艦隊大海戰の模樣は既に急電を發し報道したれども倚ほ其詳況なりと云ふを聞くに本月十四日第二遊擊軍及び八重山艦は仁川を留守し本隊第一遊擊軍及び第三遊擊軍は陸軍兵を護送して翌十五日仁川より大同江に進み夫れより第三遊擊軍及び本隊艇、磐城、天城は更に陸軍應援の爲め大同江を遡り鐵嶋に至れり越えて十六日本隊及び第一遊擊軍赤城西京丸の十二艘は仁川大同の部署既に定まり最早や後顧の憂ひなきを以て格別目指す事とては無けれども海上風波穩かなるを幸ひに鹽邊白鷗の閑夢を貪らんも如何なりとて舳艫相啣み欵乃相呼び大同江口の假根據地を發し十七日早晨海洋嶋を後に見て大孤山沖に來かゝるや去月豐嶋の一戰に渤海灣深く遁匿し今頃は山海關の嶮崖に樂隱居を極め込みて居るならんと思ひ居たる清國軍艦十四隻と水雷六隻は打揃ひ久々の散歩氣晴しに胡山の景色眺めんとにや盛京省の浦邊つたひに旗艦定遠及び鎭遠を初めとし致遠、來遠、經遠、威遠、靖遠、平遠、揚威、超勇、廣甲、廣丙その他水雷相連なり東の方鴨綠江指して進みゆく其目的蓋し平壤の急を聞き遲蒔ながらも之を救護せんとするにありしか其邊の消息未だ之を知る可からずと云へども兎に角彼れ我海軍を恐るゝの深き旅順口より直路、鴨綠又は大同に向はずして極北の邊海を迂回密航しつゝありしは一點の疑ひなき所なる可し斯くて我艦隊の黑烟勇ましく北進し來るを見るや是迄で前後相逐ふて東行しつゝありし清國艦隊は悉く

●●●●●●艦首を轉じて一列に南向

し整頓龍車の喩をも思はず我に敵抗の擧動を示したり是に於て日頃待ち構へたる我艦隊は勇往突進直ちに西方よりして其後に迫り初めは三千メートルの距離を隔てゝ相砲擊し漸次相近きて後逐に一千メートルの擲距離に接近し砲烟彈雨天に漲り海を覆へし咫尺辨ぜず一時は非常の激戰なりしが敵艦は常に敵する能はず東南の方向を目指はるを我艦隊は逃がさず追擊して東南より南、南西より西北、西北より北東へ轉々廻戰して西は海洋嶋、東は大和嶋、北は大孤山沖を界として其間を

●●●●●●廻戰するみと凡そ五回

群虎相逐ふが如く衆龍相爭ふが如く壯快壯烈の光景名せ譬ての物比す可き者なし然れども悲ひかな我軍艦赤城比叡及び西京丸は其速力他の諸艦に劣るが故に轉々相馳突する間に自然他艦より後れて遙か後部に取殘され我本隊に追擊されて逃げ走る敵艦の爲めに包圍攻擊され非常の苦戰を爲したる右三艦の敵艦に比して損害多かりしは全く之が爲めにして三艦の敵艦へ與へたる損害も亦隨つて他艦に勝る所あるべし

斯くて當日午後零時四
二時間數回の激戰中西
上に敵艦は倚ほも同號
て同號は直ちに船首を
水雷は狙ひ外づれて船
通過し幸ひに無難なる
破損され進退自由なら
艦の居並びたる方向に
右に其道を開き同號を

●●又々水雷●●

したり然るに右水雷は
深く水中を潛り入十メ
浮び出づるの仕掛なる
の船底を擦り拔けて三
り斯くの如く西京號は
路を假本據地に向け十
り其他比叡、赤城、松嶋
も格別の事なく我艦概
艦の破損は實に著しく
三四艦が沈沒するとき
はるゝ程にして豫て沈
わらんか甲板上より長
多の豚尾漢が取り縋
も眼のあたり慈悲容赦
遣るだに哀れなり號中

●●來遠號の沈●●

は古今絕無の奇觀にし
受くるや否や船尾は沈
上に逆立ちの體なりし
の立往生とは開闢以來
來遠その噂夫なる可し
遺海の海戰は斯くの如
他十七日夜敗餘の敵艦
艦隊司令官の報告あれ
す

●●●●●

丁汝昌の名言　清國北
を疼ゐせし者易に渤海灣
怯懦を罵る者あり然れ
閣下の海軍力は迚て
戰はゞ必ず敗北して我
以日本は最早や恐るゝ
艦隊しと雖せも之れ
未だ容易に渤海灣內を
が敢て灣外に出でざる
の爲めに得策なりしや
に逹ひ灣外に出でたる
も失へりと云ふ直諫
林泰曾　丁汝昌、ハン
して實ならば清國海軍
あるのみ聞く泰曾は
稱ぐべきものは此人の
軍由來好戰手なぞ

○●國時議會の

一昨日の議場に從ひ
りしも當市內には議
を以て之に充てんとの
員を容るゝに足らず日